2023年6月18日　　朝 礼 拝 順 序 （午 前 10 時 半）　　（№25）

司式　杉山昌樹牧師

前　　奏　　奏楽　大日南苗香姉

開 会 招 詞　コロサイ3章16節

＊賛 美 歌　2:1（ソングシート）

1. 主のみいつとみさかえとを　こえのかぎりたたえて、またき愛とひくきこころ

御座(みざ)にそなえひれふす。　アーメン

＊開 会 祈 祷

罪 の 告 白　祈祷書2　罪の告白①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。　　主イエス・キリストの御名によって。アーメン。　(詩編51)

罪の赦しの宣言

十　　戒　　祈祷書4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。　(出エジプト20、申命記5)

＊賛 美 歌　２：２（ソングシート）

2. ゆだねまつるわが重荷を主はかわりて負いたもう　なやみおおき世の旅路も

主のいませばやすけし。　アーメン

公同の祈祷　6　ニケア信条

我らは、唯一の全能の神、天と地と、すべて見えるものと見えざるものとの創造者を信ず。

我らは、唯一の主、神の独り子、イエス・キリストを信ず。主は、あらゆる世のさきにみ父より生まれ、神よりの神、光よりの光、造られずして生まれ、み父と同一の本質にいます真の神。万物は彼によりて造られた。主は、我ら人間のため、我らの救いのために天より降り、聖霊によって処女マリアより受肉

して人となり、我らのために、ポンテオ・ピラトのもとに十字架につけられ、苦しみを受け、葬られ、聖書に従って三日目によみがえり、天に昇り、み父の右に座し、生ける者と死ねる者とを審くために、栄光をおびて再び来たりたもう。その御国は終わることがない。我らは、生命の与え主にして、主なる聖霊を信ず。聖霊はみ父と御子とより出で、み父と御子とともに礼拝され、あがめられ、預言者を通して語りたもう。我らは、唯一の聖なる公同の使徒的教会を信ず。我らは、罪の赦しのための、唯一の洗礼を告白す。我らは、死人のよみがえりと、来たるべき世の命とを待ち望む。　アーメン。

(325年ニケア信条：キリストの神性、381年コンスタンチノポリス信条：聖霊の神性)

献　　金　　（黒）・（赤）神戸改革派神学校　　70

今献ぐるそなえものを　主よ　清めて受けたまえ　アーメン

ジュニア礼拝

聖　書　朗　読　　詩編25節6－14節（旧約聖書855頁）

フィリピ3章12－16節（新約聖書365頁）

説　教・祈　祷　「愚直に前へ」杉山昌樹牧師

＊賛　美　　歌　　４２:１，２（ソングシート）

1. み恵み豊けき　主の手に引かれて、この世の旅路を　歩むぞうれしき。

(おりかえし) 妙なる御恵み日に日に受けつつ、み跡を行くこそこよなき幸なれ。

寂しき野辺にも、賑わう里にも、主ともにいまして　我をぞ導く。(おりかえし)アーメン

＊主　の　祈　り　　祈祷書1

天にまします我らの父よ

願わくは御名をあがめさせたまえ

御国を来たらせたまえ　御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり　　アーメン。

＊頌　　栄　　６３

天つちこぞりて かしこみたたえよ、み恵みあふるる　父、み子、み霊を。アーメン

＊祝　　祷

後　　奏　　(黙祷)

報　　告 司会門脇献一長老・受付那珂百合子長老（次週：古澤純一・門脇献一長老）

礼拝当番/献金当番　桑原和子、水流幸子/堀口敦也、番場燈路（次週）番場のぞみ、森川真菜/番場朝喜、番場豊麦

本日　受付　１階：大日南信也執事　２階：藤井牧子執事 ／ZOOMホスト・録音：番場験也

次週　受付　１階：若月学執事　２階：古澤迪子執事 ／ZOOMホスト・録音：雨宮信

フィリピ3：12－16　「愚直に前へ」

伝道とは生き方？

　先週も言ったかもしれませんが、このフィリピ書3章は、伝道者パウロが自分の生き方を率直に語っているところです。その場合に、率直に、というのが大切で、彼は全く格好をつけていません。ガラテヤ書の書き出しを見ますと、「人によってではなくキリストと神によって使徒とされた」ということが言われていまして、パウロ先生は、霊的な人、とってもすごい人、と言ったイメージで語られがちです。しかし、ある意味で自分の生き方の信念を持っていたパウロが、ここでは、むしろ、自分は完全ではない、まったく未完成のものだ、というのです。それは決して謙遜ぶっているのではなく、どうやら本気で、そう思っていたようですし、さらに言うのなら、むしろ、その不完全な生きかたの方がいい、それが正しいのだ、こんな風に考えていて、フィリピの人たちに対しても、皆、こちらの生き方に来たらいい、と招いているようなのです。

パウロの生き方

　そのようなパウロの生き方は、今日のところでは12－14節にかけて語られていますから、まずはそれを丁寧に読んでいきたいのです。最初の言葉はこれです。「すでにそれを得たわけではない」。この「それ」という言い方は、ちょっと困った言葉です。例えば家族同士でしたら「ちょっとそれとって」でなんとなく伝わるかもしれません。でも、この場合の「それ」はいくつも候補があり得ます。例えば先週の個所でしたら8節の「キリストを得る」という言葉がありました。もし、「それ」がキリストのことなら、パウロは今なお、キリストを得ていない、と言っていることになります。あるいは、その次の9節で「キリストの内にいるものと認められる」とあります。これも全く同じことで、もし「それ」が「キリストの内」にいることだとしますと、パウロは未だ「キリストの内にいないかもしれない」と言っていることになります。そんな馬鹿な、と思うかもしれませんが、ある意味では、本当にそう思っていたようなのです。一方で9節ではそれに続いて、「キリストへの信仰による義」が自分にはある、と言っていましたので、その点では、たしかにパウロは、「キリストを得ている」、はずですし、「キリストの内にいる」はずです。しかし、その後、11節を見ますと「復活に達したい」となっています。これはまだそうではない、ということです。当然ながら、復活というのは死の先にあることですから、一度死んでみなければ分からない世界です。こうしてみていきますと、パウロの言っている「得たわけではない」というのは、得ているところもあるけれと完成していない、得つつある、という意味だと言えます。

不完全なものとして

　そうしますと、パウロが今日の所で、まだ得ていない、と言い張っていること、さらにそれに続いて、すでに完全な者となっているわけではない、ということは、このパウロの未だ、という状況全体を指しているのです。そうしますと先ほどの「それ」には、イエス様ご自身を完全に得ること、完全にキリストの内にいるものとなること、復活に与ること、さらに言いますと、14節に書いてあります天において神様からの「賞」を得ること、全部が入ります。このような、これから向かっていく、すばらしい世界、神様からの祝福全体を指して、パウロは「それ」という言葉を使っているのです。こういったものをまだ、完全に手に入れていない、途中になるものだけれども、それを目指している、こういったものがもう見えていて、それを目指している、と言うのです。それが、12節中ほどの「何とかして捕えようとして」という言葉で表されています。これは明らかに、目標が目の前にぶら下がっている、そんなイメージです。手を延ばせば、届きそうなくらい近く、目の前に目標があって、それに向かって、身を延ばし、手を伸ばし、そう言うように全力を挙げて前のめりになっている状態です。それが、13節の「後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けて」という言い方になって現れます。まさに、なりふり構わず前にすすむ、ということをパウロ自身が言うのです。

キリストにとらえられる

　けれども、このような前のめりの姿は、ただ、自分勝手にそうしているのではない、とパウロは言

います。それが、12節後半の「自分がキリスト・イエスにとらえられている」という言葉です。この言葉を理解するためにも、先週の個所との関連が一番わかりやすいかもしれません。10節にこんな言葉がありました。「キリストとその復活の力を知る」です。ここで「と」あるので両方、ということです。そうしますと、キリストを知らされる、復活の力も知らされる、そういうことがパウロの中で今起きている、という意味です。それこそが、キリストにとらえられている状態です。それは具体的にはどんな状態でしょうか。一つには、祈りの時、あるいはイエス様を人々に伝えている時、自分の中で、働いている力がある、そんな感覚は、常にあったのだと思います。その極めつけは、例えばコリントの信徒への手紙IIで、パウロは、ある時恍惚となって第三の天にまで引き上げられた（コリントII12：2）、というような体験です。その一方で、たとえば、パウロにしましても旅をして、いろいろな人と出会って、特に信仰的なことではない話をする時があったでしょう。あるいは、何でもない、食事の時でも、雑用をしている時といった日常の一齣でも、イエス様を意識する、イエス様が何を望んでおられるかを考える、気が付くと、そんなことを考えさせられている、ということもまた、あっただろうと思うのです。このようにして、気が付くと御心を訪ねている、ということこそ、パウロが言うイエス様が私をとらえている、という状態です。そのような生き方はまた、同時に、イエス様の苦しみ、その死にあやかっていく生き方につながっているとパウロは言います。なぜなら、自分が自分が、という部分が小さくされていって、自分の中でイエス様の存在がだんだん大きくなっていく、という方向に進むからです。

ひたすら走る

　所で少し、話がずれるかもしれませんが、パウロは、色々な小説や映画に、登場しています。その描かれ方も様々で、さっそうとした青年の姿で登場することもありますし、小柄で髪の毛の薄い、少々疲れた中年男性の姿で描かれていることもあります。実際には記録がありませんから、どれが正解とも言えません。ただ、一つ言えるのは、パウロは情熱的でって、しかし、ひょうひょうとしたところもあり、どこかすっきりとした感じの人だったのではないかと思うのです。なぜなら、パウロは全く一つのことに自分の人生をかけていたからです。それは14節で語られている言葉の通りです。「神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」。「ひたすら走る」、そのようにして理想を追い求める、というのはすがすがしい姿です。そしてこれがパウロの生き方です。その見た目がどうであれ、問題は生き方です。本気で一つの目標に向かっているという姿勢です。これがパウロの伝道の姿勢です。まだ完成していない、この地上では完成することがない、ただ、天においてのみ実現する目標に向かって不完全なものとして、前のめりに、今を生きる、これが自分の生き方だ、このようにパウロはある自信をもって言い切っているように見えるのです。

不完全なものが完全

　これに続いて、パウロは、15節から今度はフィリピの教会の人たちに向かって呼びかけ始めます。だから、というのは今までのパウロの生き方を前提としています。だから、私たちの中で完全な者、と続きます。おやっと思う言葉です。先ほどまでの所で、パウロは、じぶんは、まだ得ていないもの、不完全なもの、ただ、追い求めるものだ、と言っていました。ところが、ここでは完全な者と言います。たぶんこれは、パウロ流の招きの言葉です。私たちの中で、完全になりたいと思っている人たち、と言いたいのです。例えば今、ここから、さあ、皆さん完全になりたいですか、と呼びかけたらどうでしょうか。すなおに、「はい」と言ってくださるとうれしいのですけれども、完全になりたい人がいたら、コツがあるよ、というのです。そのコツとは何か、と言いますと、「このように考えるべき」と続きます。それは、14節までのパウロの考えかた、と同じように、ということです。そして、パウロは、「自分はまだ不完全だ」と考えていたのでした。そうしますと、禅問答のようですけれども、少なくとも、完全なものになりたいのなら、まだ、神様の前で、もっともっと、頂くものがある、これからも神様に助けれもらわなくてはならない、不完全なものだと考えるのがいい、自分は不完全だと考える人こそ、実は一番完全に近い、、成熟した人だ、こういいたいのです。

別の考えがあっても

ところがパウロは、「あなた方に何か別の考え方があるなら」、とつづけています。人は誰でも、いきなりこんな話を聞かされて、その通りに考えられるわけではない、パウロは、この事も重々承知しているのです。皆さん別の考え方をしているかもしれない、いや、それは大いにあり得ることだ、といいます。しかし、それに続いてもう一つの言葉を語っています。そして、この所が実は、とても大切なところです。かなり理屈っぽいことを言いますけれどもお付き合いください。この15節の終わりの部分「神はそのことをも明らかにしてくださいます」というのは何のことでしょうか。特に問題なのは「そのこと」という部分です。その一つ前とつなげて読みますと、別の考えのことか、と思います。一人一人別々の考えを持っている、神様はそのことをも明らかにされる、と続くとしますと、みんなばらばら、それぞれの考えがあることが明らかになる、こう言っているようにも聞こえます。しかし、この所の読み方としては、もう一つの可能性があります。実は、15節の前半にあった「このように考えるべき」ということばの「このように」とは、先ほど確認したとおり「パウロの考え方」のことでした。そして、この前半の「このように」という言葉と後半の「そのこと」と訳されたことばは、実は同じ言葉です。そうしますと、この所は、みんな色々と考え方があるかもしれないけれども、でも神様は、そんないろいろな考え方をしている人たちに、私と同じ考え方をも明らかにしてくれる、それがわかるようにしてくれる、こう言っているかもしれないのです。

到達したところにより

そしてもし、こちらの読み方を取るとしますと、16節の読み方もまた変わってきます。今ある翻訳では、これももう一度読んでみますと「いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて、進むべきです」となっていまして、みんなが、それぞれに与えられたところに従って、生きていくべきだ、だから、別々に生きることになっても仕方がない、と言っているように見えます。けれども、屁理屈を言うようですが、この言葉の中にある「到達したところ」の「ところ」とはいったいどこでしょうか。それは、みんなが勝手にたどり着いたところでしょうか。しかし、もし先ほどのように、パウロが神様によってまず示されて、そして、やがてはみんなも一人残らず示されていく、あのこと、自分は不完全なものとして、イエス様を追いかけて生きている、という「ところ」に基づいて、というようにも読めるのです。そうしますと、この15，16節は、別々に好き勝手に生きていこう、という勧めではなく、むしろ、みんなで、夢中になって、イエス様を追いかけて生きていこう、こう招いていることになります。そして、私はこちらの方が、はるかによいと思います。なぜなら、このようにして、一つの目標に向かって歩むことこそ、真に教会らしい有り方だからです。

愚直に前へ

みんながばらばらに勝手に思い通りに生きるのではなく、むしろ、神様がキリストによって上へ召して、与えて下さる賞を目ざして、愚直にみんなで前に向かって進んでいく、これが教会のあり方、これがキリスト者の生き方、です。その目標はキリストであり、永遠の命です。私たちもまた、この目標に向かって、愚直に進んでいきたいのです。

祈り

父なる神さま。あなたは、一人の伝道者に働きかけ、その人生をただひたすらにあなたと歩むものとして下さり、その生き方を、真に幸いなものとしてくださったばかりではなく、それを多くの教会に知らせてくださっておりますから感謝します。私たちも、この信仰の先達が見た幻に思いを寄せ、その後に従い、何よりもキリストにしたがい、またキリストを目指して生きるものとしてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。